

ソフトバンク、 Red Hat コンサルティングを活用し アジャイルな DevOps アプローチを導入

SoftBank

ソフトウェアとサービス

Red Hat® コンサルティング

Red Hat OpenShift®
Container Platform

ソフトバンクグループの一員であるソフトバンク株式会社は、新規事業領域への投資と参入に取り組むにあたり、コラボレーティブな DevOps アプローチとコンテナ・テクノロジーを活用したシステム開発体制の改善に着手しました。ソフトバンク株式会社は、Red Hat コンサルティングと連携しながらベストプラクティスを学び、Personal Agent Manager (PAM) プロジェクトに DevOps を採用するためのロードマップを策定しました。同社では Red Hat OpenShift Container Platform をアプリケーション環境の基盤として導入したことで、開発者の生産性、コラボレーション、デプロイ頻度も向上しました。



通信

従業員数：
約 **17,000** 人

メリット

- DevOps とコンテナ・テクノロジーの理解を深め、ロードマップを作成し、新しいコンテナプラットフォームをデプロイ
- アジャイルな DevOps アプローチを通じた積極的なコミュニケーションでチームワークを改善
- リリースのデプロイ頻度を 2 週間に 1 回から 2 週間に 118 回へと増加

「自分たちだけでコンテナの仕組みを学ぼうとしていたら、PAM プロジェクトを予定通りに完了させることはできなかったでしょう。Red Hat はさまざまな分野の専門知識を備えたチームを派遣してくれたので、そのサポートを受けて、OpenShift の使い方と効率的な開発方法を迅速に習得できました」

ソフトバンク株式会社 プラットフォーム推進課チームメンバー
佐々木 拓哉氏



fb.com/RedHatJapan
twitter.com/RedHatJapan
linkedin.com/company/red-hat

jp.redhat.com

「Red Hat はさまざまな分野の専門知識に通じたチームを派遣してくれたので、そのサポートを受けて、OpenShift の使い方と効率的な開発方法を迅速に習得できました」

ソフトバンク株式会社
プラットフォーム推進課チームメンバー
佐々木 拓哉氏

DevOps でビジネス成長と先進的 IT アーキテクチャをサポート

ソフトバンクグループの通信子会社であるソフトバンク株式会社は、ロボット工学、IoT (モノのインターネット)、AI (人工知能) など、新たなビジネス領域への進出を積極的に進め、革新的な新サービスを作り出しています。これらのサービスは最大 800 のシステムを使用し、5,000 人近くの社内スタッフおよびパートナースタッフが開発、保守、運用に関わっています。

同社内では、迅速で効率的なシステム開発を求める声が高まっていました。このような要求の高まりに対応するため、ソフトバンクではグローバル IP プラットフォーム (GIP) 戦略というシステム開発プラットフォームの取り組みに着手し、さらに効果的なサービス基盤の作成を目指しました。この取り組みの目標は、ソフトバンクグループ参加の各企業を、日本のソフトバンク株式会社がホストするシステムで統一することです。また、同社の IT 部門は開発コストを半減させながら生産性を倍増させるため、運用面での改革にも着手しました。

「当社の GIP 戦略の重点は、情報技術部門全体で増大している需要に対応するために、新しいアーキテクチャを使用することです」と、ソフトバンク テクノロジーユニット IT 統括 IT 本部プラットフォーム統括部プラットフォーム開発部部長、山下 豊文氏は言います。「この新しいシステム開発リソースを分散して新しいビジネス成長をサポートしますが、この目標に向けて作業しながらサービスレベルを維持しなければなりませんでした」

しかし、大規模なエンタープライズ環境で開発の生産性を向上させるのは困難を伴う課題でした。当時実施されていたさまざまなプロジェクトではウォーターフォールモデル、つまりタスクと手順を順番に完了してから次のステップに進むというアプローチを使用していました。また、レガシーシステムの保守作業のため、開発者は価値の高い業務に集中できませんでした。

ソフトバンクでは、DevOps への効果的な移行を支援できるテクノロジーパートナーの手を借りて、コラボレーションを重視する開発アプローチで GIP 戦略をサポートすることにしました。

専門知識豊かなサービスパートナーの協力を得てアジャイルアプローチを習得

DevOps とアジャイルな業務プロセスを導入するため、ソフトバンクはテクノロジーベンダーとして信頼のある Red Hat との連携を選択しました。ソフトバンクは数年にわたり、社内システム開発に Red Hat Enterprise Linux® や Red Hat Middleware などの Red Hat 製品を使用していました。

ソフトバンクは Red Hat コンサルティングとのワークショップを通じて、アジャイル手法、継続的インテグレーション/継続的デリバリー (CI/CD)、テスト自動化といった、DevOps 導入を成功させるための基本ステップを習得しました。Red Hat コンサルタントは成果物を明確に定めた詳細なロードマップを提供し、同社の進行管理を補助しました。

「DevOps やスクラムベースの開発のメリットである進行中の CI/CD や自動化テスト機能や、期待される成果を、すぐに理解できました」と、ソフトバンク テクノロジーユニット IT 統括 IT 本部プラットフォーム統括部プラットフォーム開発部プラットフォーム推進課課長 杉村 亜矢氏は語ります。

この初期トレーニングの後、ソフトバンクは DevOps の導入先として AI プロジェクトの 1 つである Personal Agent Manager (PAM) を選びました。PAM とは、店舗内でのお客様の問い合わせへの対応を自動化するアプリケーションの管理システムです。

新しい DevOps 機能のサポートを強化するため、ソフトバンクは Red Hat ソフトウェア環境を拡張し、Red Hat OpenShift Container Platform を追加しました。OpenShift Container Platform はソフトバンクのデータセンター内でデプロイおよび維持され、同社のアプリケーションサービスを保存します。また、ストレージを動的にプロビジョニングし、マルチテナントおよび個々のコンテナ内での機能の変更をサポートするパッケージされたイメージによってさまざまなチームとアプリケーションの作業をサポートします。

Red Hat のソフトウェアとサービスでアジャイルスキルと生産性を向上

エキスパートからの指導を受けながらコンテナおよび DevOps スキルを育成

ソフトバンクのチームは Red Hat コンサルティングと密接に連携し、トラブルシューティングの支援やベストプラクティスの習得など、エキスパートによるサポートと指導を活用しました。

「DevOps の成功に必要な鍵のひとつはコンテナ活用です。ですが、私たちにはそれまでに使用経験がほとんどなく、関連するスキルもありませんでした」とソフトバンク プラットフォーム推進課の佐々木 拓哉氏は言います。「自分たちだけでコンテナの仕組みを学ぼうとしていたら、PAM プロジェクトを予定通りに完了させることはできなかったでしょう。Red Hat はさまざまな分野の専門知識に通じたチームを派遣してくれたので、そのサポートを受けて、OpenShift の使い方と効率的な開発方法を迅速に習得できました」

Red Hat は、各 DevOps チームにエキスパートを配置することで、ソフトバンクが新しいコンテナ・テクノロジーとよりコラボレーティブなアプローチを導入し、継続的に活用していくために必要な知識を提供しました。

「私たちが DevOps アプローチを短期間で導入できたのは、Red Hat コンサルティングのおかげです」と佐々木氏は語ります。

コラボレーションの基盤を確立

ソフトバンクのチームは、働き方にアジャイルな DevOps 手法を導入することで、より効果的に連携できるようになりました。スクラム手法に基づき開発を行うことで、チームメンバーが作業の状況とタイムラインを他のメンバーと共有できるようになるため、プロジェクトの進捗が可視化されるとともに、さらなるコラボレーションの機会にもつながります。

「DevOps アプローチの一環として各メンバーのタスクを共有することで、職場で協力を大切にする雰囲気醸成され、プロジェクトの進行を助けようという意識がメンバー全員の中で強まりました」と佐々木氏は言います。

反復的なアプローチとモジュール式のテクノロジーでデプロイ頻度を向上

より応答性に優れたテクノロジーと業務へのアプローチを導入したことで、ソフトバンクのチームは迅速にフィードバックを受け取り、必要に応じてプロジェクトおよびコードを調整できるようになりました。たとえば、自動化と CI/CD により、コードのテストに関する繰り返し作業が減少しました。

また、OpenShift Container Platform を導入したことで、アプリケーションを独立した環境内で、関連するコードライブラリと一緒にパッケージ化する助けとなりました。このように分離されていることで、他のアプリケーションに影響を及ぼすことなく 1 つのアプリケーションだけに変更を加えることが容易になるので、開発時のイテレーションとテストが加速されます。

これらの変化の結果、ソフトバンクの開発チームは PAM プロジェクトのデプロイ頻度を 2 週間に 1 回から 2 週間に 118 回へと増加させることができました。

DevOps と自動化を新たなシステムとプロジェクトにも適用

PAM プロジェクトの成功を受け、ソフトバンクではテクノロジーユニット内の他の開発チームも DevOps の業務アプローチを採用しています。

「今後ソフトバンクでは、システムの半数以上を DevOps 手法で開発する予定で、IT ライフサイクル全体におけるシステムプロセスの自動化を検討しています」と杉村氏は言います。

また、同社では部門を横断するタスクチームを結成し、DevOps および関連スキルを推進しています。

「Red Hat との PAM プロジェクトを通じて、開発者が率先して品質と効率を重視するようになりました」と山下氏は語ります。「PAM の成果を足がかりに、開発手法の標準として DevOps を定着させたいと思っています」

ソフトバンク株式会社について

ソフトバンクグループの経営理念である「情報革命で人々を幸せに」の下に、ソフトバンク株式会社 (TOKYO:9434) は通信サービスと最先端テクノロジーを結びつけ、新規事業の創出と運営を行っています。ソフトバンクは日本で 4400 万以上の個人および法人のモバイル契約者を有し、「Beyond Carrier」戦略により、5G、ビッグデータ、AI、IoT、ロボット工学、その他のあらゆる主要テクノロジーを活用するネットワーク事業者としての独自の強みを活かして業界を変革しています。



RED HAT について

エンタープライズ・オープンソース・ソフトウェア・ソリューションのプロバイダーとして世界をリードする Red Hat は、コミュニティとの協業により高い信頼性と性能を備える Linux、ハイブリッドクラウド、コンテナ、および Kubernetes テクノロジーを提供しています。Red Hat は、新規および既存 IT アプリケーションの統合、クラウドネイティブ・アプリケーションの開発、Red Hat が提供する業界トップレベルのオペレーティングシステムへの標準化、複雑な環境の自動化、セキュリティ保護、運用管理を支援します。受賞歴のあるサポート、トレーニング、コンサルティングサービスを提供する Red Hat は、Fortune 500 企業に信頼されるアドバイザーです。クラウドプロバイダー、システムインテグレーター、アプリケーションベンダー、お客様、オープンソース・コミュニティの戦略的パートナーとして、Red Hat はデジタル化が進む将来に備える企業を支援します。

アジア太平洋

+65 6490 4200
apac@redhat.com

オーストラリア

1800 733 428

インド

+91 22 3987 8888

インドネシア

001 803 440 224

日本

0120 266 086
03 5798 8510

韓国

080 708 0880

マレーシア

1800 812 678

ニュージーランド

0800 450 503

シンガポール

800 448 1430

中国

800 810 2100

香港

800 901 222

台湾

0800 666 052



fb.com/RedHatJapan
twitter.com/RedHatJapan
linkedin.com/company/red-hat